

# ジュエリーの造形

小林 誠

KOBAYASHI Makoto

## ■起点

大学2年初秋、鍛金を専攻して間もなく、絞り技法の課題が与えられた。はじめにキャラメル箱くらいの、分厚く手のひらにずしりと重い7.3真鍮の塊が渡されたことを覚えている。

その塊を延べ槌のからかみでひたすら叩いて、指定の薄板(地金)にするため四方に延ばした。完成立体に必要な寸法の平面のサイズ、直径300mm×厚さ1.2mmの丸い板材になるまでに2日くらい費やしたのだろうか。

不慣れもあって球状に絞るのに1ヶ月近くかかったと思う。特性ピッチボールが出来上がった。以来45年、そのピッチボールは打ち出しや彫りの際の道具として、私の仕事場で大切な存在となっている。

短時間で、鉄さえ延ばす自動圧延ロールの方法ではなく、人力の「勘」と「集中力」を頼る方法であった。時間はかかっても繰り返し槌打することで、金槌と地金の関係を体得しなければ、「ものはつくれない」という教育だったのだろうと振り返る。ただし、そのことに気付くのは随分後年になってからであった。

私はこれまで金属を用いてジュエリーを制作してきた。銀と金、赤銅などの銅合金が主な材料だったが、他も含め金属の性質を的確に反映する造形は容易ではなかった。金属以外の材料にとり組む関心と余裕がなかったともいえよう。今もって金属そのものが好奇心の対象、奥深い材料だと考える。

その起点がこの課題であったように思い起こす。

## ■感性・情念・要旨

工芸作品は材料の持つ特有の物理性・化学性に基づくこと、その性質を活用することで狙いとするかたちが作られる。その形態に自分の感性をどのように一体化させ得るのか、ということが作者の独自性を示すところであろう。

私にとってもそこが継続的課題であり、ジュエリーに取り組んでしばらくは、無理・無駄・ムラを伴う実験を繰り返した。しかし実験で得たいくつかの技術や考え方といった収穫は、少しずつ自分の求めるジュエリーの造形の要旨に育った気がする。そしてそれらは以降に於ける企業や教育の仕事に生かすことができたように思う。

1980~95年、外部デザイナーとしてジュエリーの中堅の企業にかかわった。社員数約60名のうち、デザイナーとモデラーあわせて10人ほどの布陣は、自社開発を重視する姿勢を示していた。当時のジュエリー業界は不思議な熱気につつまれていて、私が契約した会社も内外で成果を求める激しい競争の雰囲気満ちていた。

発案から試作・商品化のプロセスでは、目先のトレンドや情報のみにとらわれることなく、強い独自性が求められた。年毎に掲げるコンセプトベースやテーマに沿って企画、デザインがすすめられていた。囑託の立場であったが、私も彼らと一緒に「今の市場に無いジュエリー」を探る努力を続けた。(\*資料③~⑦)

コンセプトを通しきるために、トップとは度々議論をした。それはジュエリーの質と、オリジナリティに対する考え方の食い違いについて話し合い、共通の方向を得ることであった。

周辺で量産される商品としてのジュエリーはわかりやすく、良否がはっきりしていた。「良いものは答えから逆算されて生み出される」。それは結果至上主義であるとともにデザインから仕上げの流れに於いて、効率の悪い方法は認めないということであった。

それらの殆どはデータを重視し、「ワックス型」をベースに鑄造する反復製作で、少量であっても、地金からつくられるものは極めて少なかった。コンピュータやレーザーの導入等によって新たな手法と成果が競われた。金属材料をそのまま成形する方法が、ジュエリーの造形であると考えた自分とは対極であることに間もなく気付くことになる。しかし、その地金成形のテイストが評価され、やがて新作発表のステージがプロモートされた。東京・大阪を中心にほぼ年3回行った。実にハードだったが、自分の、通しきるべき主張を確かめることのできる濃密な機会であった。金とダイヤモンドを使った作品が主であったが、15年の間数え切れないくらい作ったことでつかんだ手応えがある。それは、「材料には情念を与える」ということと、「かたちには要旨がいる」という、ジュエリーの造形の応えであった。効率的とはいえないであろうが、手仕事というアナログプロセスを通したことによって得た答えかもしれない。

私の場合は当時のように今も、「確かめ」を行ってから制作に入ることにしている。

それは材料の「硬い・柔らかい」、「厚い・薄い」、「軽い・重い」、「光る・光らない」…といった対比や調和、あるいは材料の持つ「固有色」の効果やデリカシーを注視することである。注視することで見えてくるかたちを探さなくてはならない。それらは限りない表情と、不思議な可能性を示すということに於いて興味が尽きないからである。「何かを見つけない」という好奇心に必須のエスキース、手続きといえる。

機械による圧延、伸線では均一な厚さ、太さと断面形状ができる。槌起、絞り、打ち出し技法ではほとんどの立体は、各部分の厚さが異なる。材料の持つ「展延性」を活かして作られる形は、その性質が作用して結果的に部分の厚さが複雑、微妙に変化するからである。

材料が抗って自分の求める形にならないことがあった。しかしそれは材料が意のままにならないのではなく、自分の意図が希薄か、材料の性質に添って形づくられていないことが原因したのであろう。技術を伴うにつれて、少しずつ順応してくれたように思う。

## ■価値

私が制作に追われ、のめり込んだ'80~'90年代にかけては、ものに対する人々の関心や価値観が急速な変化をたどった時期であったように振り返る。ジュエリー領域もまた、ブライダルジュエリーのように時代や地域を越えて「変わることなく意味を帯びる」といった普遍性を保つ一方、それまでのライフスタイルを見なおす指向が影響した。マーケティングに基づき、商品セグメントが活発に分析・展開されて、それまでと異なる価値を探し求め出した。かつてのようにステイタスシンボルだけでははかり得ない価値基準

に気づき始めたのであろう。

ジュエリーを「着ける」という高揚感を宝石・貴金属という「素材価値」のみではなく、そのデザインと表現の「独自性」に求める人が増え始めたことは、つくる側にもそれに対応する姿勢が求められたことになる。

テイストやなにがしかの「癖」は必要ない、とするのがモダンデザインのひとつの「かたち」の考え方・整え方であったが、人々の価値観、指向が多様化した'80年代以降の「かたち」にはジュエリーの造形に於いても、かつてない多様で新たな試み加わる。

とりわけコンテンポラリージュエリーの分野では、トレンドやモードといった形式とは同調せずに、個々がのびやかなメッセージを発信した。

ジュエリーの価値を財産性から解放したのは、コンテンポラリージュエリー分野の成果といえる。この分野がジュエリーという手段・表現を通じて、素材や技術のみではなく、内面にかかわる意見を述べようとする姿勢は認めねばならないのだろう。

それらの多くは物質文明に対するメタファー、時にはサブカルチャーであり、あたかも単に「美しいジュエリー」に対する反定義を示すアイコンのように映った。

一方において、「美しいジュエリー」の力もまた、揺るがないであろうが…。

同じ頃、私の場合はジュエリーの表現に、コンテンポラリー分野が掲げるそうした主張とは別の、こだわりと価値観を持ち続けた。それは金属を基にして、「かたちを見出す鍵」がどこにあるのかを探すことだった。

ジュエリーや装身具の歴史を見ると、必ずしも希少な素材だけに価値与えるのではなく、「表現の独自性」に重点を置く造形が過去にも多くあり、そうした価値観が近年だけの特質ではないことがわかる。

日本でも、江戸期の優れた髪飾りや根付け、刀装具には、それらが如何に身に付ける「その人」と一体化したか想像される例が多い。

モチーフの大胆なデフォルメ、洒落な図形の扱い、精巧な技術を見せる出来栄えには、作り手の尋常を超えた能力とセンスを推し量ることができる。

ジュエリーとは一体何だろう、ということがわかりかけたのは、江戸期の工芸や装身具の水準の高さに気づいてからのように思う。それは「工芸のこころ」の示唆であり、自分の制作姿勢の戒めとなった。

私はジュエリーの造形には、自分なりのテイストや「癖」を与える必要があると考えてきた。

それは、地金成形で可能なかたちの要旨＝もと型を見つけることであり、そのために実験し、デザインと制作を繰り返すことであった。

材料と技術の関係からできる自然なテイスト、癖を生むにはいくつかの鍵を要する。

私の場合、ジュエリーの識別と造形上の尺度は、次の5つのエレメントからはかってきた。そのことが次第に、かたちの要旨＝もと型を見つける鍵となっていくた。

ジュエリーとは

- ①そこに在る……………身に付ける
- ②意味は持たない……………意味を持つ
- ③時折つかう(非日常)……………よくつかう、なじむ(日常)
- ④トレンドのもの……………愛着、大切なもの、無二のもの

④直感(見た目・アイキャッチ)…部分・ディテール

⑤量……………質

によって価値付けられる。

これらのエレメントの比較、あるいは重きの置き方ではかれるということである。

そこから導き出された形態は、

- ・体の部位、あるいは体全体との関係から生じる「かたち・シルエットの印象」と
- ・よく視ることで伝わる部分の効果、ていねいな「表現方法・ディテール」の両方に於いて完成度の高いものが優れたジュエリーであると考え、それを目指してきた。

ジュエリーは、時空を超えて「守護」や「祈り」のものとして意味づけられ、一方では自らを「示し」、「表現」するものとして存在し続けてきた。

現代では多様なカテゴリーで示されているが、それらはまったく「自由」に解放された「ただそこに在るもの」ではない。

常に「体と関係」する造形である。ということに加え、良質なメンタリテイをもってつくられる必要があるように思う。ジュエリーは、「便利ではない」がこころに効くという意味で、「役に立つ」ものとして定義づけられることだろうか。従って、画一化しがちな現代に於いて、ひとつと「個々」に与えられた数少ない自己表現を示す分野といえる。

良質なジュエリーが持ち得る「意味」とはそういうことであるのだろう。

そのようなジュエリーは、コストパフォーマンスを満たすことを優先する生活具が多い現況にあって、自らを鼓舞し刺激する具となり得るのだろう。なり得るということはつくり手の熱情と向上心が不可欠ということで、その姿勢の結果よく使われ、大切なものになる可能性があるのだと考える。自分もまたそうした造形を心がけてきたつもりである。



①マドラー(950銀、K9-K20)、  
個展(1991横浜アートボックス)



②ペンダント兼ブローチ(K18、Pt900、ダイヤ  
モンド)ピエンナーレ日本ジュウリーデザイ  
ナー展(1989銀座和光)



③リング(K18、Pt、ダイヤモンド) 1981



④リング(K18、Pt、ダイヤモンド) 1982



⑤ブローチ、リング(K18、Pt、ダイヤモンド) 1984



⑥ブローチ(K18、Pt、ダイヤモンド) 1982



⑦ブローチ(K18、Pt、ダイヤモンド) 1982



⑧ブローチ(950銀、K9-K22) 日本ジュウリー展・ジュウリー賞(1988渋谷西武、他)



⑨リング、イヤリング、ブローチ(K18、Pt900、ダイヤモンド) 1993



⑩ブローチ(K18、Pt、ダイヤモンド) 96JewelleryArtCompetition・優秀賞(1996、麻布工芸美術館、他)



⑪ブローチ(K18、赤銅、ルビー) 1994



⑫ブローチ(K18、赤銅、ルビー) 1994



⑬ブローチ(K18、Pt900、赤銅、ルビー、ダイヤモンド) 1994



⑭ブローチ、イヤリング(K18、Pt900、赤銅、ダイヤモンド)



⑮ブローチ(K18、Pt900、赤銅、ダイヤモンド) 1991



⑯ブローチ(K18、赤銅、ダイヤモンド) 1991



⑰ブローチ(K18、Pt、ダイヤモンド) ビエンナーレ日本ジュエリーデザイナー展(1999 銀座和光)

⑭～⑯ ビエンナーレ日本ジュエリーデザイナー展(1995 銀座和光)



⑱ブローチ(K18、Pt、ダイヤモンド) ビエンナーレ日本ジュエリーデザイナー展(1997 銀座和光)



⑲



⑳



㉑



㉒

⑲～㉒セットブローチ(950銀、赤銅) 94TheArtOfJewellery(1994 麻布工芸美術館)



㉓リング(K18、Pt900、ルビー)



㉔ブローチ(950銀、K18)  
個展(1999銀座ACギャラリー)



㉕ブレスレット(950銀)  
個展(1999銀座ACギャラリー)



㉖ペンダント兼ブローチ(950銀)  
個展(1999銀座ACギャラリー)



㉗ブローチ(950銀)  
個展(1999銀座ACギャラリー)



㉘



㉙



㉚



㉛

㉘～㉛ブローチ(950銀、K18) 個展(1999銀座ACギャラリー) pfoto ジュエリーフォト



㉜ブローチ、ペンダント(K18、赤銅)  
2000



㉝



㉞



㉟



㊱

㉝～㊱ブローチ(赤銅、K18、Pt900、ダイヤモンド)  
日本ジュエリーアート展・招待(2006上野の森美術館、他)



⑳リング(950銀、K18) 2002



㉑リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) 2001



㉒リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) 2001



㉓リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) 2001



㉔リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) 2003



㉕セットリング(K18、Pt900、ダイヤモンド) JewelleryArtSapporo (2004 札幌芸術の森工芸館)



㉖リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) 2003



㉗リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) 2004



㉘リング(950銀) 2005



㉙ ㉙~㉚ セットリング (K18、Pt900、ダイヤモンド) 2004



㉛



㉜セットリング(950銀、K18) JewelleryArtSapporo (2000 札幌芸術の森工芸館)



㉝リング(950銀) 2002



㉞



㉟



㊱

㉞~㊱リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) ビエンナーレ日本ジュウリーデザイナー展(2003 銀座和光)



㊲ブローチ(K18、Pt900、ダイヤモンド) ビエンナーレ日本ジュウリーデザイナー展(2007 銀座和光)



㊳リング(K18、Pt900、ダイヤモンド) ジュエリーデザインの源と作品展(2007 岐阜)



㊴ブローチ(K18、Pt900、ダイヤモンド) ジュエリーデザインの源と作品展(2007 岐阜)